

村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

第23回村野藤吾賞 審査評

受賞者 伊丹潤

作品 二つの手の美術館と、水、風、石の美術館

昨年（2009年）秋、机の上に一冊の本が置かれた。

「伊丹潤 1970～2008」（主婦の友社出版）であった。

その作品集の帯に書かれた短文に強く惹きつけられた。

“今、世界の建築界はデザインのユニーク性だけを重んじることに狂奔して、その造られた建築に感動するというリアリティーさえ失っている。

本書では「東洋の伝統に根差したオリジナリティー」を重視し、生命力と存在感あふれる「伊丹建築」の魅力を紹介。彼の思想は連なる光、影、風となり表現分野を疾走する。時にはその建築は彫刻のように強く、あるときは陶磁器の茶碗のように、せつない程美しい。”

この文に誘われて、その1頁1頁に瞠目を止めることができなかった。

芸術家、個人の作品集は、作品の年代順にしたがって編纂されるのが一般的である。しかし、この作品集ではもっとも近年の作品から時を遡行させているのである。その第1頁はふくよかな優しく深い石仏の手にはじまり、一連の計画案が続き、さらに一連の4つの美術館、2007年“二つの手の美術館”、2006年の“水の美術館”、“風の美術館”、“石の美術館”の実作が紹介されている。そして次々と時を遡り、これまでの全作品が、伊丹自身と、他の多くの人々によって書かれた論文と綾をなし、私たちに深い感銘を与えるのである。

“もし、建築に完璧さだけを追い求めるとしたら、まぎれもなく機能に研ぎすまされ、冷たく味気ない空間になるであろう。そして無駄という掴みどころのない言葉の範疇には、人間の生になにか非凡なもの、あるいは空間の本質みたいな何かがあるようだ、と、常々感じてきている。……(中略)

人間の本能のような、人がそこに存在するだけで生気が張りつめる空気みたいなものが流れる。…… しかるに建築家の心眼というものに頼るしか手はない。また、人間の思索を深める空間と造形のピュアルティーは、その土地の伝統の文脈の自然なる抽出と、作者の強靱な祈りをこめた造形感覚と自由な思想が基底になくてはならない……”

とする論証とともに、作品群が登場するのである。

この賞は、ここ3年以内に完成した建築作品で、特に大きな感銘を世に与えたものを設計した建築家に贈られるものであり、今回は伊丹潤氏の一連の作品が選出された。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎